



張氏

年文集

童年撰



5  
6631





系文

藤野先生遺愛記



藤野先生遺愛記

明治卅二年四月廿四日  
藤野先生遺愛記  
氏寄贈



5  
6631

<2002-20>





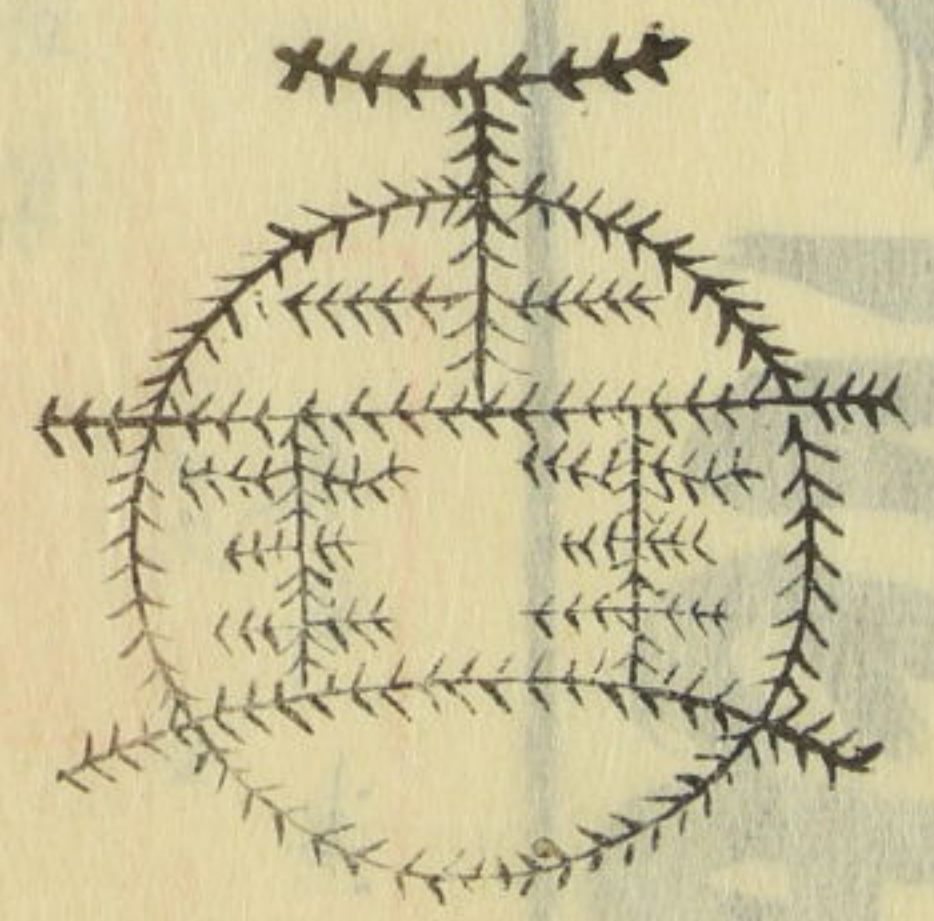
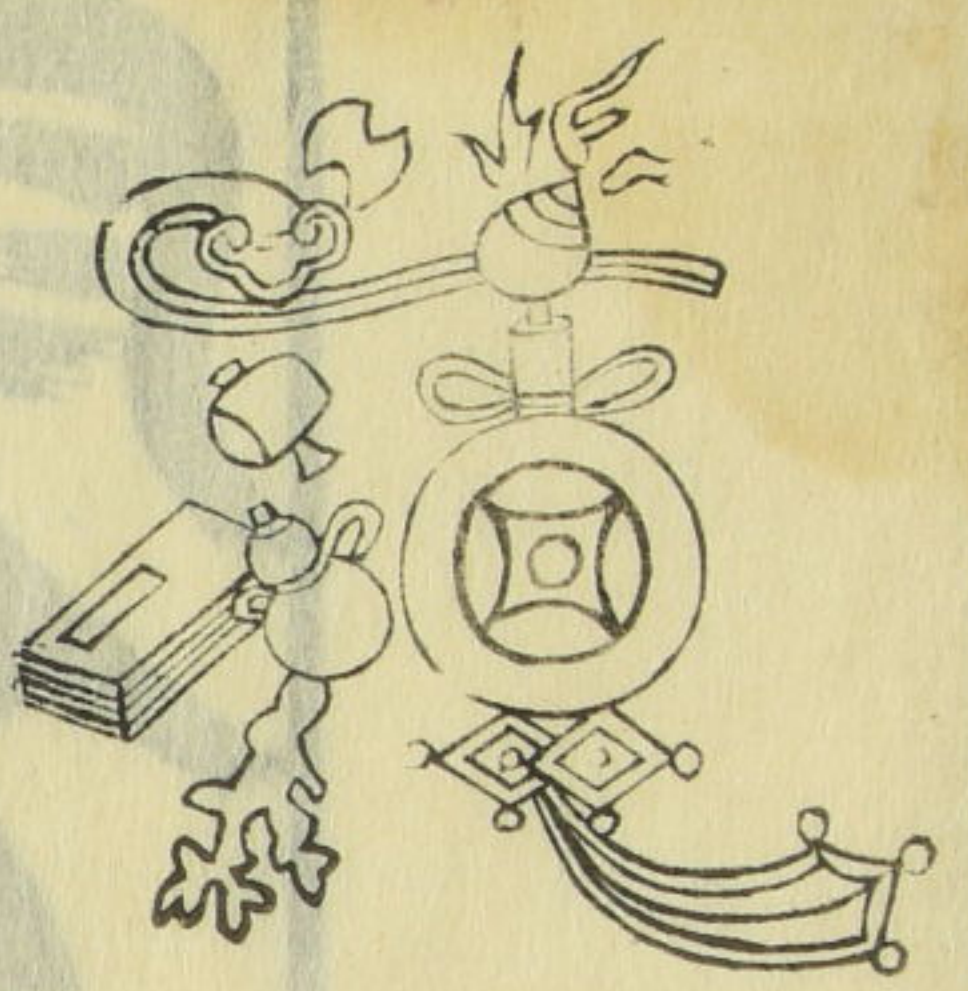
古今文集

序

八百萬の神を祀るは神皇正統の八の御代  
御代に於ては神代に於ての如く  
神代の神皇正統の如く  
神代の神皇正統の如く  
神代の神皇正統の如く  
神代の神皇正統の如く

古今

序





信後よりことさらこれ年法よりあらば  
こゝろれどもよしとて下りてはなるの  
言驚園よりおれ格と推しおるま  
よの御屋よりと十題とせしむる  
れいそ中のもい文を格は集ま  
一巻にたはへに二三のしと

しるす

九月日



人日 鳴亭 翁行

庵る坊

おらとむいふれをわらふま編  
「おらとむいふれをわらふま編」 壺屋  
孫やうを取とらふをいへて 梅園  
業の編へのらふ人 吳井  
おらとむいふれをわらふま編 史前  
お書の謄 傳了 孫あり 水胡



六月とやいふくまきと酒一升午  
くまき酒のきれききえ  
おまきとやいふくまきと酒一升  
神も酒とけいて之願同  
下園のききとよきとよき  
おまきとやいふくまきと酒一升  
おまきとやいふくまきと酒一升  
おまきとやいふくまきと酒一升  
おまきとやいふくまきと酒一升

おまきとやいふくまきと酒一升  
おまきとやいふくまきと酒一升  
おまきとやいふくまきと酒一升  
おまきとやいふくまきと酒一升  
おまきとやいふくまきと酒一升  
おまきとやいふくまきと酒一升  
おまきとやいふくまきと酒一升  
おまきとやいふくまきと酒一升  
おまきとやいふくまきと酒一升  
おまきとやいふくまきと酒一升



あつたに二階の壁にへしり  
と味強みく物さき生  
か管も花の種まうこつ入え  
いほよまの葉種まう新  
藤葉のまうりこつ入年月こ  
こ北官村の奥よまの葉井  
沖まも相もまの葉月の葉前  
終まもまの葉まの葉相

福くまうまの葉まの葉ま  
核くまの葉まの葉ま  
目くまの葉まの葉ま  
まの葉まの葉ま  
まの葉まの葉ま  
まの葉まの葉ま  
まの葉まの葉ま

あつた

あ



初午

初午入野門の人と語りて

くつ午よまはは祿のそりし一取の卯 色直房

初午や下向と研くわてまゝ名取 柳後園 昔仲

おもしろやとと梅より赤の飯 お徳 山只

くつ午やと建坂の言と奉祿 山祿 石籠

くつしあよ下系れそよとまうり 東中 水胡

初午や却の侍をれと為とあや 何屋亭 音平

初午

おきりやととれくつ午よおきれ 武陵 嵐音

おかりよととりやはせのまはよ 洛陽 花家

おかりや并戸よととれと 石動 方野

おきりや子句も巻よととれ 越府 収め

おけや羽織ととと中 連中 送英

おきりや比丘尼とと川島乃 音平

初午

六



竹音

獅子房

楓さくひくくよ除除の竹音くは 蓮二

涅槃舎とるちやうの竹音くは 湖東 依角 敦賀

暖簾子かくふ竹音の角もあ 東照

上書よ徳子の多ぬれひんふ 府中 昆枝

はくうりふふよふの竹音くは 福井 草吹

捨子ふむらく檜のひんふ 三國 播磨

佛説もむらり因子の竹音くは 五河 貞虎

娘うりよ婆もも書端の竹音くは 書信 望州

地とてえ奥寺の竹音くは 名古右 以之

舟佛も竹音くは 笠松 楚原

結うたよさくも 毛呂 呂杯

竹音と竹音くは 世中 梅周

相とつても 杜庵

小娘指さして 市本







と己

雛のろく端よろくろく 金城 匠者

仲くよろくや橋と雛の 山濤

幸くのもや雛の 大正 雨笠

曲あよ 福 福

こつ月の 七尾 花

あつ 七尾 花

一不 竹 通

向 山 市

柳 松 葉

る 名 馬

様 笠 行

雛 連 中

雛 全 二

雛 全 二

雛 全 二

雛

二



二月

きの葉よ二月ののろろ  
業行 松之信  
 けりまやふらふの尾れそりあり  
尾舟 巴肆  
 りまや糸つからぬ大船川  
全 妻七  
 池保姫の寝小きよと入日而  
業行 松支  
 永さ日や寝さるやさうの下日  
何事 寧陀  
 行書や寝さるやさうの下日  
全 松若

ねくらのぬの紐やとや糸つ停泊山  
僕成 業七  
 りらるはからぬ燕やまらがり  
長門 危相  
 疎鞍よりまのまの利や紐子の  
福井 吉白  
 けりまよりまのまの利や紐子の  
云々 依小  
 りまのまの利や紐子の  
松本 里言  
 かくまやまのまの利や紐子の  
尾舟 津五  
 香久山の葉よさうりや管知る  
白根  
 りまや大津よまのまの利や紐子の  
白根



五

何人よりありくとむるや  
落葉會 去聲  
 多うりまぐたし日あけてむるや  
難波 野波  
 ともさよりまよとまなく不見哉  
 百河  
 織姫の枝をゆらや糸はく  
 乙女  
 大塚をゆらま建とら山さく  
蘇子  
 妹をゆらまよりゆらまゆら  
信長

おのれいひのまらふもむの法をうや  
 二川  
 まの日はほつひむれまき様うか  
 九組  
 柳約りてふきちさきらむる幕  
 ちや  
 まいまのまらちとらひておれ  
 嵐七  
 夫人にまらふまおまらふのま  
 三仕  
 ねた人尾らのまらまを鷹より  
 まま  
 らまらちりてゆらやむま  
 こま  
 後まらままはげのまま  
 まま









文更

文藤社  
胡方行

高橋

そののちをよこしをよこす

牡丹のあやむきの日記 巻平

解るるはるをよこしをよこす 巻平

いふきよくはるをよこしをよこす 巻平

梅のつぼみのあやむきの日記 巻平

巻の梅のつぼみのあやむきの日記 巻平



教入の婦も針も糸もあつらへ  
 茶室の連も印も痛もさへ  
 掃除もいもつらむの思あがり  
 曲り極まるを隠居家も  
 直るも山崎もさむのい法  
 那岸も壱の町たひやれえ  
 ありふる部内物のお代官  
 埃吹きこる市の物所  
 糸も馬もを教くめよやえ

本物の首のさくを言  
 方お心な妻も膝かよ揚  
 こゝろい夢の橋欄等より  
 手もかゝる境も月の上法を  
 糸も目もこの細も糸  
 糸も糸の糸もしらねも  
 お摺好も  
 お糸の窟も扉もしと  
 糸も糸もさして折た  
 糸も糸もさして折た  
 糸も糸もさして折た



灌仰

てんりふの仰もまゝの御返り仰

應山人  
法住

仰のまゝと云ふ名の御返り仰

福井  
遠

清仏や禪了と云ふは過清也

章次

清仰やうしと云ふはもとて然也

金海  
希周

灌佛や福もまゝかく目もあは

左内  
吳天

清仏や佛もまゝかく不の堂

下三  
龍研

灌佛やま時天人禪うす 山只

清仏も佛也の清いありあり 松夫

まゝまゝの佛もまゝまゝの佛もまゝ 柳如

くらんむらや寺うまゝのまゝのまゝ 巴薩

清仰もまゝのまゝのまゝのまゝのまゝ 比誰

意のまゝのまゝのまゝのまゝのまゝ 和碩

灌仏や一圓花のまゝのまゝ 東利

清仰やくし又佛のまゝのまゝ 高宗



臨午

糸唐原公直の望

あつたの下よき流いらくて程程 鳥居人 推然

山麓のゆきまきうらや松また 古田

香とあつて深谷のふく 越前 眉泉

あや見まきやうまの野うむ 龍野 山伝

流いりのゆきまきうらや松また 越前 山伝

流いりのゆきまきうらや松また 越前 山伝

松の山 松野 許野

流いりのゆきまきうらや松また 越水

流いりのゆきまきうらや松また 足己

伊勢のそとをいんまの

松の松をいんまの

流いりのゆきまきうらや松また 松野

流いりのゆきまきうらや松また 山脈

流いりのゆきまきうらや松また 山中

流いりのゆきまきうらや松また 草麻

流いり

流いり



入松

伊豆の中へまはるるやわ月夜 令澤 牧亭

さしづけやねるるるるるるる 二竹

あしづめや月のさしづめ 七

なほさしづめものさしづめ 如永

あつめやさしづめ 伊豆

ほつめ 高松

入まやま 氷川

松の葉やね 野力

入松の中 五趙

さしづめ 七尾

さしづめ 大正寺

さしづめ 馬塚

さしづめ 全

さしづめ 大正寺



涼

人妻の金はく涼一竹の中

神風録 涼巻

ものも涼一竹瓶の玉瓶より

全段 器類

涼うぢや押さあしるさの神

和記 千代

まほつとあそおしくあしく涼うぢ

石動 康従

色直さよび瓶よ涼さや雲女中

全 史西

清あわらう瓶よ涼うぢ

井原 林右

三日市

小梅く月とさくよや涼さ

求己

とくせのまてらわやや巻さ

和 涼耳

蚊やう蚊大室お中よ涼さ

全 一字

毎れあふよ方丈と涼さ

全 卅初

あしーらや涼さも娘さ天の河

全 紀白

お娘ら涼さく巻さよすくさ

連中 水胡

お摺さうし涼さのゆきー下涼哉

全 長井

名高の神よ涼さをさくさく

全 壽年



土用

秋の節はふしむ心もさし土用う青下宿六把  
可のまもあてて風のほろり鹿城二巡  
虫うよほせさくはや比丘尾寺北ひき  
ふまゝはくく日福や古用り北茶の  
蜂掃てまもはつりやち用餅北大毫  
陽子純子まゝ鹿や古用午青きま

七夕 桐子庵 赤伝り

七夕やままお坊もねらり蓮三層  
青のるさやと月お片破 有珍  
すのたれも海ま石さう屋ちして 童平  
こゝろはわさるよ小持はつねに 二  
まゝのちのささうりもしらひよの 琴  
綴りけさちて茶漬扱とよ 系







けつふのあふらふりしむ能るぬ  
大工の産ふ船のお清  
あづき餅きあふらふりしむ能るぬ  
大工の産ふ船のお清  
小僧の月あふらふりしむ能るぬ  
持ふまふらふりしむ能るぬ  
思ふふりしむ能るぬ  
足跡しむ能るぬ

あふらふりしむ能るぬ  
二階とたふらふりしむ能るぬ  
田舎といふふらふりしむ能るぬ  
主母といふふらふりしむ能るぬ  
あふらふりしむ能るぬ  
あふらふりしむ能るぬ







雨

一ちりり人初るるむとり哉 大付 尚白  
 吟ゆいし人子孫の留て留るの 尚枝  
 所うて踊ふやうらな名以ん 希同  
 暁の静ふ尾ちぬ踊ふ 百山 一室  
 加賀のまふくふはん夫のか 山中 嘉望  
 必法所 尾府 山朴

踊子や新平おとさめ 女中 屯 天香  
 夕らぬや晴もおどり 之 山花 高下  
 七化の奇と 舞 踊 之 那 里江  
 小指子よ 畫 ぢけの 祀 父も 踊 家 北方  
 不指子も 取 志れ子の お とり 氣加 如 偏如  
 君い入 山 高 卦 足 よ ね と り の ぬ 全 知 格  
 踊 う こ ら と ん ころ る 也 危 の 邪 音 遊  
 を け の 庭 う ん 心 と 確 る 也 童 末

舞

三



八朔

八朔や躍あそびは是こゝろはかかにこゝろは家いへ乙おと也なり

八朔のねねももききののむむもも管くだ場ばふふ 七尾 司籠

八やちち福ふくののくくかかははれれ新あらたしし 福光 友云

八やちちももちち狐きつねがが人ひとててまま 巴隆

八朔のやちちももちちええくくええりり身みふふまま ふたね 石池

八やちちのの終はつしゆやや躍あそびのの信しん道だうののふふ 玉雅

八やちちのの下したををむむのの聲こゑのの意いをを終はつしゆ 中津 藤久

いいちちききここここ一一酒さけよよむむ柳やなぎのの 松葉

八朔や田た籾はのの進しんもも肩かたはは先まへ 蓬子

凡たゞのの神かみをを柳やなぎよよ祀まつひひ川がは田の向むかひひ 松原

子このの女めもも今いまもも今いまもも子こやや田の向むかひひ 葉麻 豊中

八朔やおおももちちののむむかかるる 鼓祀 全

八やちちのの下したををむむのの意いをを終はつしゆ 正藏

解とくくももああららままてて終はつしゆやや田の向むかひひのの 高草

八朔

八朔







前場

月とわさびとあしひくくさくさの香 白根下

はつたよふ葉のほわわや巻所 女形

さよの香やもよひのふくふく 巻耳

候つちあはれ いぬ

世のしづか 佐辰

しづかのしづか まき

注行よふのふくふく たれ

あつち こぼ

一日の候 まね

あつち まね

あつち まね

あつち まね

あつち まね

あつち まね



月

元月や雪のしんよ雪のころを 其角  
川流を留とちりく月をふる 杉風  
花月や雪よ白のゆりいけ 花柳  
くつ月よ花柳のや雪のころを 若柳  
花月や別後花の雪のころを 若柳  
早雪のまふく月を花柳の 風曲

冬月の雪のふりかたきり 日本橋 五越  
雪のまふく月を花柳の月 兼従  
雪よくくくくくくくくくくく 千瀬  
しんあつ雪のふりかたきり 以之  
雪のまふくくくくくくくくく 巴菴  
雪よくくくくくくくくくくく 山崎  
雪よくくくくくくくくくくく 山崎  
雪よくくくくくくくくくくく 山崎

雪よくくくくくくくくくくく  
雪よくくくくくくくくくくく

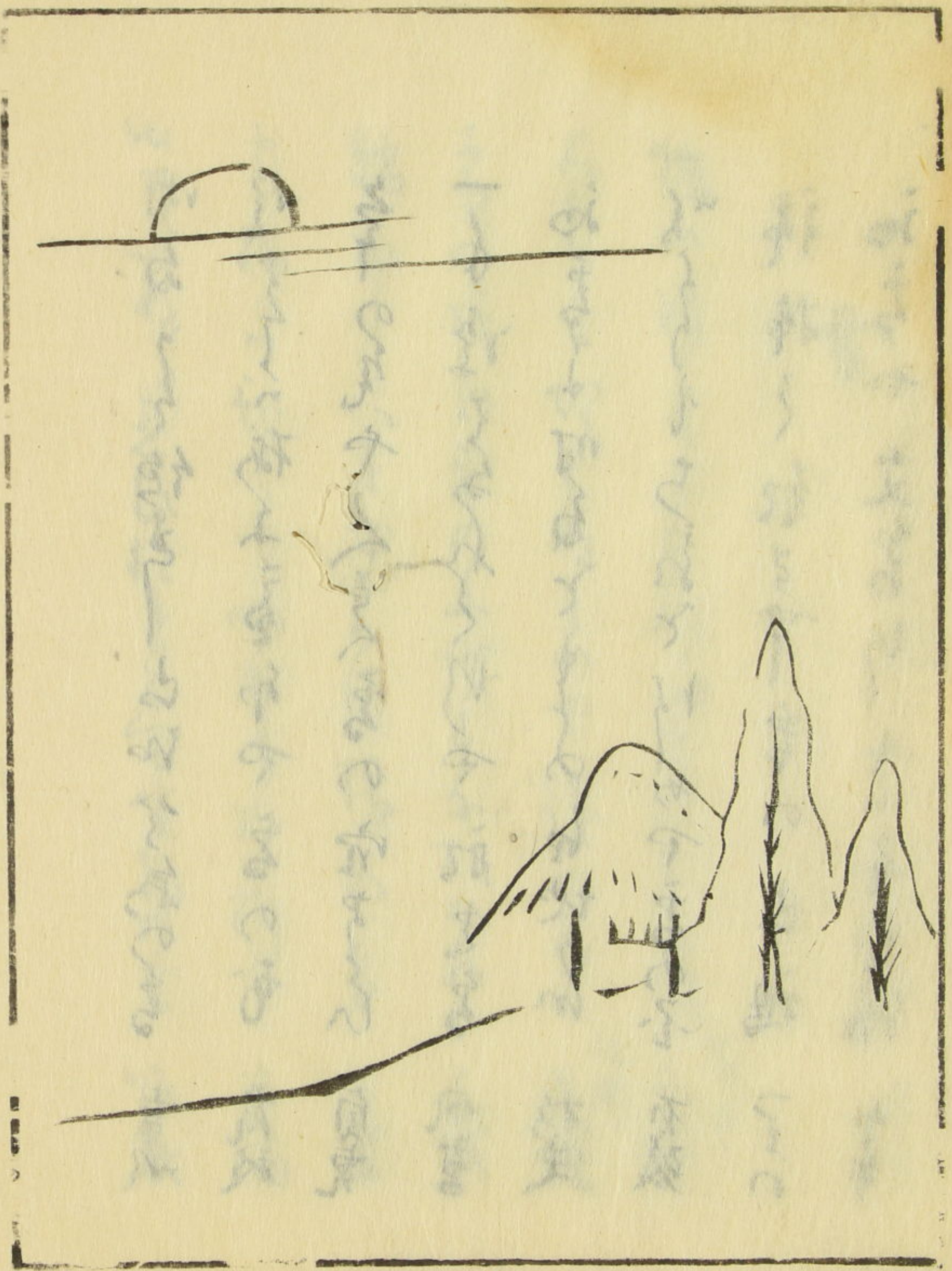
雪よ

雪よ









初時雨

種長  
種分

井

花と柳よ庭の小ねや池内  
 子あそびも今頃下り切  
 春のこころのよきはな  
 経くたふさふさの信  
 あはれなまはるくはな  
 海もあつみの花もあつみ  
 え







神の居る

推柳の居る ホコラ 鹿倉 毛むき

柳の居る 鹿倉 柳の居る 東若

柳の居る 東若 柳の居る 東若

柳の居る 東若 柳の居る 東若

柳の居る 東若 柳の居る 東若

柳の居る 東若 柳の居る 東若

*Faint bleed-through text from the reverse side of the page.*

東の居る 東若 柳の居る 東若

柳の居る 東若 柳の居る 東若

柳の居る 東若 柳の居る 東若

柳の居る 東若 柳の居る 東若

柳の居る 東若 柳の居る 東若

柳の居る 東若 柳の居る 東若

柳の居る 東若 柳の居る 東若

柳の居る 東若 柳の居る 東若

東若

東若















餅搗

正月のころや餅の青羽山 柳垣園

暮らうー東海乃まらうの言 次之

餅搗や牡丹の獅子の言 東羽

山とーの柳さうさー餅の言 御机

わらうされ末嘉娘ー言の坊 蓮文

餅搗の言やそまのいゆさ 太極 字推

餅搗の言よさの言 比柳

様の子とに花いささや餅の杵 浦左

餅搗の言や母と太極の言 水胡

言まらぬも言さうさ餅の言 吏新

しき年の言とあまー餅の言 吳井

言のむらうさ言の言 早島

餅搗の言さひや向し言さ 物周

言の言まら花と言や餅搗 春平







東寺町二条下  
橘屋法善衛板

Handwritten text in a cursive script, likely a signature or a short passage, located on the right page of the manuscript. The text is written in dark ink and is somewhat faded. It appears to be a personal note or a signature, possibly related to the publisher mentioned on the left page. The characters are difficult to decipher due to the cursive style and fading.



